



大方あかつき館報

第23号
2015年6月発行

あかつき

書くために 生きる

～上林暁文学館を訪ねて～

古書かたりあふ書店・店主 森岡 たかし

入場券のかわりは貝がらひとつ。二階にあがっていくと、上林暁の笑顔が迎えてくれた。その横には、小説にもなった「ブロンズの首」。

二十数年ぶりに会った山沖さんは、少しやせた感じがするけれどちっともかわらない。「これが睦子さん、こつちがお父さんで、上林と奥さんがここ。」上林の生涯が壁面いっぱい紹介されていて、何点かの写真パネルが掲げられている。上林の若い頃、家族が揃って写っているパネルの、セーラー服姿の睦子さんと和服姿の奥さんを指さしながら、おだやかな声で説明してくれる。

次のパネル、机の前に坐った上林が、何かいっしょうけんめいに執筆している俯きかげんの顔が、なにか私の想像していた枠の外の上林を目にしているようで、きわめて新鮮に感じる。人間の笑顔も好きだが、懸命に何かに打ち込んでいる人間の顔にはもっと魅かれるものがある。

*

「暁の文学への執念は書くために生きるという表現に尽きるであろう。書くとは自己の存在を確認することである。右半身不随の状態にあつて、なお、左手で書き続けた十八年間の〈病床文学〉は、彼の文学への執念の証しである。」(パネル)

*

「上林には熱烈なファンがいて、そんな人が一年間に何人か訪れてくれます。そんな人は、私より上林のことを詳しく知っていて・・・。何も説明することがないんです。」そう言いながら

いねいに説明してくれる。説明を受けながら、上林と私との距離がだんだん縮まって行くのを感じる。最後に目にしたのは、上林が蒲団に横になっていいる写真パネル。悲しいような笑顔の上林を見ると、「がんばってください。」と励まされているような気がした。

〔かたりあふ通信〕99号より〕



いただいたお手紙より

ふつつつと湧きあがってくるものが

～第16回企画展『過ぎゆきの歌』を終えて～

企画展が無事お済みになっておめでとうございます。ご苦勞さまでございました。いろいろとお心くばり頂き心よりお礼を申しあげます。

清水市の甥がポスターや写真を持参してくれました。先月末にも、宿毛市に住む姪夫婦が行ってくれたそうで、あまりにも心のゆきとどいたあた

たかい展示内容に感激して涙がとまらなかつたと、その日「一生懸命おぼちゃんは生きていたんだねえ」と、泣きながら電話をくれました。ありがとうございました。

八郎との並んで撮った写真、おはずかしいけれど、私は、こんな写真があったことさえ忘れていました。でも、写真を見ているうちに、私の胸のなかに、ふつふつと湧きあがってくるものがあり、胸がいっぱいになりました。八郎のそばに写っている自分を見て私は思いました。八郎との愛に純真に生きている。なんと、あどけない何の汚れも知らぬ、幼い自分だろう、自分のことしか頭になかった当時の顔、いとしくもあり、世間知らずの自分がいまさらに申し訳ない思いがいたします。

私もすっかり老いました。あれから五十数年が経ち一月になれば八十九歳になります。それでもこうして随筆家として下手な文章を書いていられるのも、八郎との七年間の礎があつたおかげと思つています。もう私は故郷の土をふむこともないでしょうが、お体を大切になさり郷土の文化の為に御尽力くださいませ。

(徳島の地にて・美馬清子)

* 清子さんは、「過ぎゆきの歌」清美のモデルとなられた方である。

『星を撒いた街』とであい

いろいろな都合でどうしても休館日にしか大方にいけなかつたのですが、それでも、外観だけでもと思ひ、訪れる事ができて、本当に良かったです。



フォーク歌手・
世田谷ピンポンズ

す。次にまた文学館を訪れる楽しみもできました。僕が上林暁にずっぽりハマってしまったのは、昨年のはじめ、夏葉社から出た「星を撒いた街」を読んだのがきっかけでした。ことに表題にもなっている「星を撒いた街」に描かれているさやかな人々の営みの美しさのようなものに魅かれたのです。その後、京都に住んでいる事もあり、本の撰者である山本善行さんと知り合い、その縁で夏葉社の島田さんとも知り合うことができました。僕は、実は、京都で音楽をやっております、今年の八月に3枚目のアルバム「紅い花」を出したのですが、この「紅い花」という曲は、「星を撒いた街」をモチーフに作ったのです。そして、音楽をしていた縁でピースの又吉さんとも知り合い、交遊が続いております。これらの縁はすべて上林が中心にあり、そこから生まれたものと深く感じております。素晴らしい小説家に出会えて、本当に良かったです。必ずまた遊びに行きます。

(細谷 和宏・京都市在住)

文学館の企画展

第18回企画展

「ぼくはがんばりゆう」

く県子ども詩集『やまもも』38年の歩み

期間 4/1〜6/28

38年の歴史を持つ高知県子ども詩集『やまもも』、日々の生活や感動を綴る高知の子どもたちの「いま」が時を越えてよみがえる。

今もかわらぬ、純朴で、チョッピリやんちゃな高知の子ども達の姿に、感動を覚える。

同時開催*「青柳裕介・イラスト原画展」



特別企画展

「あつよしの夏」

く四万十川の作家・笹山久三

期間 7/3〜9/30

西土佐出身の笹山久三は、郵便局員として働きながら、生まれ育った四万十川やそこに暮らす人々を作品に描いてきた。四万十川をこよなく愛

した郷土作家の足跡をたどる。



第19回企画展

「書くために生きる」

↳ 館所蔵・上林暁生原稿展

期間 10 / 4 ~ 12 / 27

「暁の文学への執念は書くために生きるという表現に尽きるであろう。書くとは自己の存在を確認することである。右半身不随の状態にあつて、なお、左手で書き続けた十八年間の〈病床文学〉は、彼の文学への執念の証しである。」(常設展パネルより)

上林の文学の軌跡を館所蔵の生原稿で紹介する。



第20回企画展

「父が残した戦場日記」

↳ ニューギニア飢餓の戦場から、故郷へ

期間 (2016) 1 / 10 ~ 3 / 27

ニューギニア戦線で戦死した父の形見の日記。米兵の手に渡った日記は、その後数奇な運命をた

どり、戦後家族のもとに届けられる。

娘陸さんの手によって出版された貴重な日記をもとに展示。戦後70年、あらためて平和とは何かを考える機会になればと考える。



平成27年度・主な催しもの

上林暁文学館

第12回上林暁忌短歌大会

日時 7月24日(金) 12時~16時半

会場 黒潮町保健福祉センター

講師 小島ゆかり先生(「コスモス」選者)

上林暁文学講座

(あかつき館2F会議室 / 14時~16時)

* 第一回 10月中旬

* 第二回 1月下旬

上林暁の作品を読む会

(あかつき館2F会議室 / 14時~16時)

* 第9回 5 / 16 (土) 「星を撒いた街」

* 第10回 8 / 29 (土) 「白い屋形船」

* 第11回 11 / 21 (土) 「聖ヨハネ病院にて」 I

* 第12回 2 / 20 (土) 「聖ヨハネ病院にて」 II

第26回あかつき賞表彰式

日時 3月5日(土) 14時半

会場 あかつき館レクチャーホール

黒潮町立図書館

夏休み映画上映会(6作品)

日時 8 / 8 (土)・9 (日)・10 (月)

会場 大方あかつき館レクチャーホール

佐賀総合センター2F大ホール

(7 / 31のみ開催)

秋の名画座・あかつき(2作品)

日時 11 / 7 (土)

会場 大方あかつき館レクチャーホール

「光の切り絵展」*酒井敦美さん

日時 12 / 5 (土) 18時

会場 大方あかつき館

感想画(似顔絵・イメージ)コンクール

募集 12 / 7 ~ 1 / 24

展示 2 / 13 ~ 2 / 23 * 2 / 27 ~ 3 / 11

会場 佐賀総合センター*大方あかつき館

その他

上林暁顕彰会シリーズ第一弾・発行

『もはや返らず』↳ 篠田先生随聞記



(五百円で頒布)

伝説の美術教師・篠田真武の愉快なエピソードを、馨先生が絶妙な語り口で綴った、抱腹絶倒の一冊です。



あかつき館*催し点描

「ブナに魅せられて」

— 水野厚男 絵画展 —

4月25日～5月24日、町民ギャラリーで、県展洋画部門の特選画家・水野厚男さんの初個展が開かれました。山旅の中で魅せられたブナの林を描いた作品など30数点の風景画を展示。



GW期間でもあり、町内外からたくさんの方々を訪れ鑑賞されました。



「第25回 あかつき賞」 受賞者決定!

今回で25回目を迎えた「あかつき賞」。町内7名の小、中学生が選ばれ、3月7日当館レクチャーホールで、表彰式が行われました。

受賞者並びに作品名は、次のとおりです。

- 小1・永森優羽 (佐賀小) 「オオカマキリをみつけた」
- 小2・浜田錦一郎 (佐賀小) 「弟と姉のけんか」
- 小3・長崎風恋 (三浦小) 「楽しみだったマラソン大会」
- 小4・中村光望 (入野小) 「ずっと生きていてほしかった」
- 小5・松本もも (田ノ口小) 「お父さんの転きん」
- 小6・今西蘭 (拳ノ川小) 「いじめ防止子どもサミットに参加して」
- 中3・本山百花 (大方中) 「今、伝えられること」



館長奮闘記

～ブログ『クジラのあくび』より～

「沖ウルメ」で一杯

2015.04.17

館を訪ねてきた行商のおばさんの「沖ウルメ」。他の物より脂がのってて絶品である。この干物が手に入った日は、晩酌をやると決めている。「陸奥八仙」か、「うごのつき」あたりで、香りを楽しみながら一杯なんて堪えられない。

午後、レクチャーホールで郡下の小・中学校長会。受付で文学館企画展のチラシを70枚ほど折り込んでもらった。が、校長先生たちはお忙しい。終わるとサッサとお帰りになられ、貝殻はなかなか積み重ならない。こども詩集の『やまもも』展ですよ!

第17回企画展

『タカクラ・テル』

～民衆とともに歩んだ不屈の作家～

遠くは、千葉の「大原幽学」資料館の研究者をはじめ、県内外から多くの方々へ地元浮鞆出身のタカクラ



の著作や活動を知っていただく絶好の機会となりました。約400名の方々にご観覧いただきました。

感想より

- ・知らぬことばかり。太郎さんの一文もおもしろかった。「人間を信じる心」-いい言葉です。(四万十市・武内)
- ・見る資料全てが初めてで大変参考になりました。(埼玉県・鈴木)
- ・立ち読みにては去り難し。(四万十市・久保)

〈1月5日～3月25日開催〉

名古屋からの訪問者

2015.05.20

祖母・母親・息子さんらしき三人連れ、「空襲を受け兵隊の多くが死傷した上川口小で、父親が戦死」「最後の地を見たくて、はるばる名古屋から」「何か当時の資料がないか」とのこと。所蔵している町史や上川口の歴史、紙芝居などを出してくる。

慰霊碑を訪ねる約束があるとかで、早々に立ち去られたが、「最近、またおかしなことになってきて心配です」と語られたおばあちゃん。戦後70年が経つ、いまだ彼女にとっての戦争は終わっていない。